
小ネタの一部

雲間

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小ネタの一部分

【Nコード】

N4201X

【作者名】

雲間

【あらすじ】

連載にしたいけれども今ある連載が終わっていないので、温めることしかできないネタをほんの少しだけ書いてのせたモノです。それで自分を満足させようという魂胆です。激短いものもあればかなり書いたものもあります。つまり俺得なだけのものです……。基本的に中途半端に終わっています。完全不定期更新。

1、魔女っ子 2、道具に情熱

その1、クラスメートが魔女っ子だった件について

「長谷屋……？」

「……え、あ、あは、え、え、えつと、ひひひひ人違いですっ！
！」

ピンク色の丈が短い腰にリボンを巻いたフリフリワンピースに、桃色のブーツ。胸元には金で縁取られた赤い宝石、袖も膨らんでいるがやはりフリフリ。頭にはドピンクの魔女っ子帽子、手に握られているのはいかにもな魔女っ子ステッキ（先端は星付き）。

それを着ているのは高校2年生になった俺のクラスメート、堅物委員長でお馴染みな長谷屋 雫だった――。

その2、あきらかに道具屋なのに道具屋じゃないと否定し続ける女が必死で道具を集める話

小さい頃、父に誕生日プレゼントとして与えられた道具図鑑。どうでもいいものからとんでもない高価なものまで、沢山載っていた。最初は眺めるだけでよかったのだ。しかし、次第にそれだけでは満足しきれなくなり、形状を覚え様々な効力が記載されているのを暗

記した。それでも満足できなくなってしまった私は――。

「よー、ウーリ。薬草あるかー？」

「馬鹿者！ 薬草という名前ではないと何回言えばお前は分かるのだ！！ カーツ草だと何度言えば……！！」

「はいはいカーツ草ねカーツ草！ んで、あるのかよ？」

「あるに決まっているんだろっ！」

「お！ サンキュ道具屋！」

「道具屋じゃないと言っているだろっがあああああああああ
あ！！ 私は収集家、道具収集家だっ！！」

年下×年上 『断つ』（前書き）

先生に恋する青年のラブコメディにしようと考えていた話のはずが、なんだか一筋縄ではいなくなってしまった話。

「サミイ先生」

「ん……、どうしたニード。行くところは決まったか」

書物でいっぱいだが、それ以外はベッドと机とクローゼットくらいしかないサミイの部屋に、今年家を卒業する予定のニード・ラーグヘンが訪れる。世間一般的には美形とされる男だ。明るい茶色の髪に、萌えいづる草木を思い出させる緑色の眼。麻でできた貧相な服を着ていても、美形であることに変わりはない。椅子に座って読書をしていたサミイは読んでいた本を閉じ、短い黒髪をゆらし気だるそうな黒の瞳でニードを見た。

「はい、決めました。僕は先生のところに永久就職します」

「……ん？ お前は何を言っているんだ？ どこかの都市を選んでそこに住めと言ったよな？ ここに留まっていたら、研究の幅が狭まるのは分かっているだろう」

「ですから、僕は貴方のところへ永久就職すると言っているんです」

爽やかな笑顔でとんでもないことを言ってくるニードに、サミイは浅黒い色をした手のひらで目を覆って深い溜息を落とした。

また、突拍子のないことを。ニードを見るが、メガネ越しの緑色した瞳の奥底にある感情は見えない。

「馬鹿なことを。そんなもの幼少期の憧れなどを変に勘違いしているだけだ。もしくは若さゆえの過ち、といったところか」

「先生がそういうとは思っていません。けれど僕は諦めるつもりは

ありませんし、本気です」

「諦める。血迷ったことを言うな。私は結婚する気もないし、そもそも恋人を持つ気もない。以上でこの話は終わりだ。さっさと行く先を決める」

一刀両断し、サミイはニードから本へと意識を移し読書を再開させる。最近発行された、穢^{けがれ}についての本だ。散々、本当に嫌というほど穢についての本は読んだが、もしかしたら新しい発見があるかもしれないと望みをかけて読んでいる。毎度毎度同じようなことを書いている文を、読むだけの作業と化している感じも否めないが。ニードの訪問により、先ほどまで読んでいた内容が吹っ飛んでしまったせいで、もう一度冒頭から読むはめになった。

——穢の払う方法について。今日、穢を払う方法はあまりにも少なく、効果が薄いものである。約5000年前には一人の人間が何らかの方法で完全に穢を消すことができたらしいが、真相は定かではない。その人間が現れたと同時期に、一度文明は滅びてしまったからだ。それ故、5000年前の人物がどのようにして穢を完全に消去したかは不明のままである。

そもそも、穢とは何なのだろうか。穢は薄黒い靄として発生。穢がたまる場所にいると、運気が下がり不幸な事ばかりが起こる。事故、殺人、病気、天災。様々な不幸が我々に襲いかかるのだ。穢は不幸が起これば起こるほど勢いを増していき、更に不幸を呼ぶ。悪循環だ。穢が溜まっているからとはいえ、おいそれと場所を移動することもできない。どこもかしこも穢だらけで移動する場所などないのだから。

「先生、僕の話聞いて下さい」

——さて、本題に戻ろう。汚れを払う方法として一般的に知られ

ているのは、トゥルディア王国跡地にある神殿の泉から水を汲み、穢のある場所に撒くことだ。かなりのの穢を払うことが可能。しかしながらトゥルディア王国跡地は一番穢が酷く辿り着くのが困難とされており、滅多なことでない限り使うことはできない。

第二はイーセを飾ること。ただし丹念込めて作ったもののみに限る。イーセがあれば、穢のない場所で暮らす時より少し不幸な程度で済む。生活必需品だ。一度沢山のイーセを作って同じ場所に集めてみたことがあったが、一つだけの時と変わりはなかったらしい。よって、一家に一個あれば十分である。

第三に祈ること。確率が低く、あまり期待もできない。払える穢はほんの少しで、ただ何もしないよりはましな程度である。

これらを省みると、人の――

「先生」

どうやら強行手段を取られたらしい。読んでいたはずの本は目の前から消え、ニーダの手に移っている。昔ならば大人しく読書が終わるまで待つて、邪魔はしなかったというのに……、と感傷に浸ってニーダをやり過ごそうとした。

「先生がそういう態度をとるならば、僕もそれ相応のことをしますね」

笑顔なのに眼は笑っていないという器用なことをしながら、ニーダは本を適当にほっぽりだしてサミイの両手を取り鼻と鼻が触れ合うほどの距離まで詰める。

「僕、本気ですよ？ 先生。……いえ、『リーサミイ』」

艶やかな微笑みを見せるニーダに、昔の自分ならば動揺していた

だろうな……。と思いながら、サミイことリーサミイはきっぱりと
言い放った。

「お前はあいつに似ているから嫌いだ。さっさと失せろ」

「流石先生。そんな先生が好きですよ」

破綻した笑みをサミイに向け、1つキスを送った。

「で、あいつって誰ですか？」

相変わらず表情の変わらないサミイに苦笑いしながら、交友関係
の薄いはずの先生に尋問し始めた。

ともだチート！

私の友達に言うチートらしい。反則的な能力をもつことをチートと呼ぶそう。しかも、私の友達全員。自分は平凡だと言い張る、明らかに非凡のオタクな友達一号がそう言っていた。いやいや、私の方がまだ平凡だからね？

けど、そういわれるとそうかもしれない。私と友達になつてくれた人達は大体、お金持ちだったり頭良かったり美人だったり身体能力抜群だったり等々、何かしら特出している。さっき言つた友達一号は、作る料理がめちゃうくちゃ美味しい。出される料理はいたって普通な家庭料理のはずなのに、一口食べ始めると止まらなくなる。嫌いな食べ物でもバクバクいけてしまう程なのだ。どうかお店開かないで私専任の料理人になつてください後生ですから。栄養バランスとか考えた料理で私をダイエットさせて下さい、マジで。

とまあそれはさておき、自称平凡からアメリカのシャツチョンさんまで色とりどりの友達が私にはいる。あの、少しでいいのでその頭の良さ分けて下さい。私が最近英語のテストでとった点数がやばいの、お分かりでしょう？ お母様がかんかんでございましてよ。このままいつたらあなた方と遊べませんからね。

え？ 友達三号が教えてくれるって？ えええええそれだけは勘弁して下さいよあいつドSじゃん。ダメ。ゼツタイ。だから駄目だと。駄目だつてば。だからいい加減にしろといやマジ本気をお願いしますそれだけではどうかそれだけはやめてくださいお代官様っ！

……あーれー。

どもこんちゃ友達一号です。あの子との出会いはいつだったか。幼稚園が一緒に友達になったんだよね。昔のことだからきつかけなんてさらさら覚えてないけどさ。あの子と友だちになってからは、おままごとしたりおままごとしたりおままごとしたりおままごとしたり……。なんでかおままごとばかりしてたなあ。なんでだろ。とにかくおままごとばかりしてた。うん。今でも不思議すぎる。ささ、ごはんでちゅよー！ あぶー！ …… よくもあんなキチガイオママゴトを！ やれたもんですってことですよ。

んでそのまま小学校も一緒に小中高まで一緒という結果、幼馴染と言っても過言ではないと思う。へっへザマーミロ一番の友達はあたしだかな！ 跪いて足をお嘗め！ ああエリカ様あたしを踏んで罵って！ っと、…… おふざけはこのくらいにしておいて。

自称平凡とかあの子には言われるけど本当にあたしは平凡だ。あの子と同じくらいの点数とって、中間辺りを彷徨っているし。容姿に関してこそそう。んな漫画にあるような平凡な子がモツテモテナことは無い。いやあ、憧れはしますけどねえ。所詮は空想。されど空想。いいんですよ別に。恋人はパソコンの画面の向こうにいるから！ 恥ずかしがって中々画面から出てきてくれないけどさ。きやつ。リンゴーン帝国のアップナー様に私は夢中なの。なんてったって、私は夢見る乙女なのだからー！ ってまた逸れた。えへ。つまりあたしは、どこにでもいるようなオタク系女子ってわけですよ。そこ、痛いと言わない。あたしの心の内曝けだしてあげてるんだから。いやん。そうやって脱線させないでよねっ！ か、勘違いしないでよ、別にあなたの為に脱線してあげてる訳じゃないんだから！ げふげふ、テンプレッテンデレはもうお腹いっぱい。しかしテンプレと王道は紙一重。上手く使いこなせるかがポイントだな！ じゃーなーくーて。

そんなあたしにも得意なことがひとつある。料理だ。これだけは自信あるアルよ！ ワタシナンデモトクイアルヨ、タベテミルヨロシ！ ぼんじゅーるじゅってーむまどもあぜーる。だんけしえーん！ 今のは特に意味ないよ。うふ。ノリさノリ。ノリって大事よ。海苔も大事よ。あのバリバリ感が最高だと思っただけです。なのでふやけるのは困るからラーメンにある海苔は真っ先に食べる派！ だけのこ派！ きのこなんかに負けないもん！

少し、頭冷やそうか。てなわけですね。あたし料理得意なんですけど、最初はそんなことなかったんですよ。いや、誰だってそうだって言われたらそうですけど？ でもあたし違うんですよ、これが。だってあの子の為に作る度、美味しくなっていくってどうよ。だって一回目作った時、この料理を作ったのは誰だ！？ って至高のツンデレ様に怒られるくらいの出来だったのに、あの子の為に作った途端、至高のツンデレ様にべた褒めされる出来になっちゃったんだから。

小中高友達やってきたけど、あの子と友達になってからどんどん才能が開花していったのをあたしはこの眼で見てる。友達三号もそうだ。あいつも気がついたら友達だったんだけど、まあ頭いいよねって程度だったわけなんよ。それがガチで頭良くなってお前漫画出身だとツツコミなくなるくらい秀才になった。おまけにイケメン。死ね！ お前マジ死ね！ 調子に乗ってんじゃねーぞ！！ キー！！

危ない危ない、嫉妬で頭がどうにかなるところだった……。催眠術だとか超スピードだとかそんなチャチなもんじゃあ（ry げふっ。

あの子と本当の友達になると、チートになる。それに誰かが気がついたら危ないと思うんだよね。もし吐き気を催す邪悪が近づいたらどうなっちゃうのか分からない。だからあたし達は仲がよからうが悪かろうが協力してあの子を守るのである。

あ、勉強から逃れたい気持ちは分かるけど逃げんな！ 逃げんな

らあたしも連れてけい！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4201x/>

小ネタの一部分

2011年11月30日16時55分発行